

「ハマのドン」の意地

中

ノンフィクション作家

三山 喬

横浜市中区 寿町。現在のJR根岸線石川町駅に近いこの辺りは、空襲で焼け野原になった明治の埋立地だ。戦後十年目に米軍から接収を解除され、翌年には桜木町にあった職業安定所が移されて、簡易宿泊所（ドヤ）がひしめき合う「ドヤ街」が形作られた。日雇い仕事の手配師が路上で労働者をかき集める「寄せ場」になったのだ。

かつての港湾労働

当初の求人は大別して港湾労働と一般の建設関係に分かれたが、高度成長期に船荷のコンテナ化が急速に進んだため港での労働需要は縮小し、建設業の求人が

大半を占めるようになっていった。

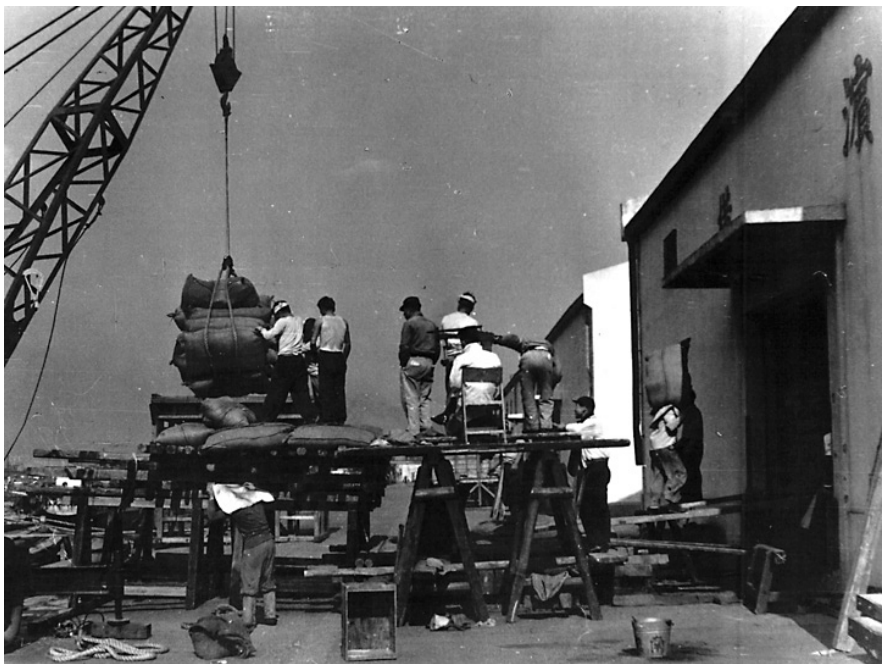
そんな往年の労働者街で私は十余年前、ここを居所にするという謎めいた投稿歌人を探し求め、本誌で『ホームレス歌人のいた冬』というルポルタージュを連載した（現在、文春文庫）。今回、久々に地区を一巡してみると、ルポ当時、すでに顕著だった街の変貌は一段と進行して、遠い日の荒々しい活気はすっかり消え、高齢者のデイケアセンターがやたら目立つひっそりしたエリアになっていた。

労働者向けだったドヤはどこも、生活保護基準ギリギリに宿代を設定し、いまや事実上、保護受給者のためだけの「団地群」と化している。さまざまな区の福祉窓口から紹介されてきた寄る辺ない高齢者がここに

住まう。つまり寄せ場時代の寿とは縁もゆかりもない人が、居住者の大部分になったのだ。

今回、改めて寿に足を運んだのは、横浜港の「ドン」藤木幸夫の価値観・人生観を探るうえで、その昔、末端の港湾労働者であふれていたこの地区に何らかのヒントはないものかと考えたためだった。しかしコンテナ化が進む前、大規模な労働者集めをした時代はすでに遠い昔。金曜日ごとに行われる公園での炊き出しを訪ねても、そこまで古い記憶を持つ住人と会うことはできなかった。

藤木本人は日雇いの労働者を求め、自ら声をかけていた当時の思い出を、自著『ミナトのせがれ』に少し綴っている。藤木は昭和二十八（一九五三年）に早大を卒業し、短期間ルウエー系の船会社に勤めたあと、三十年に父が経営する藤木企業に就職した。朝鮮戦争の勃発で、かつてなく港の仕事が激増したころだった。沖合には荷揚げを待つ船があふれ返り、「水平線が見えないくらい」にまでなったものだという。



1950年代の横浜の港湾労働風景